

< 議員の内職 >

私は議員として市民の税金から議員報酬（額面年間1400万円ほど、実際は月額65万円位）をいただきながら、「生活すべて市民のための市議員」として活動してきたわけではなかった。というか、先輩・同僚議員たちの話を聞いても「模範的市議員像」といったパターンは20年間見出すことができなかった。

ロシア旅行

私はこの20年間を通じて、「市議員だからこそ」「市議員であろうとなかろうと日本共産党員として」「日本科学者会議の会員、河上肇記念会の世話人の一人として」といういろいろな立場での活動に取り組んできた。いわば内職のようなものだが、そのうちの一つは、日本ユーラシア協会京都府連の理事として（現在は府連副会長だが）とりくんできた「手作りのロシア旅行」である。

毎年8月末、9月議会の直前に協会京都府連の会員を中心にロシア・旧ソ連圏地域の旅行を企画・実施して参加してきた。（私費で）

私は学生時代ロシア語の履修届けを出してはいたが、2回生の時などただの一度も授業に出席しないで、2月の試験のときになって試験の教室にいったらじめて「これが話に聞いていた小野理子先生か」と顔を拝見したような次第であった。だからロシア語はアルファベットが半分くらい読める程度でさっぱり状態のままだ。

しかし学生時代からベトナム・ソ連・中国をはじめ「社会主義国」には一種の憧れをもっていた。1991年ソ連は崩壊したが、米原万里さんの本はほとんど読んでいたので何となくロシア人・ロシア民族には引かれるものがあった。「金持ちからはどんなにふんだくっても良心の呵責など感じないが、相手が貧しいとなるとほってはおけない」世話好きのロシア人の話はゴマンとある。（ソ連留学組の話を書いてもそうだ）

府立総合資料館の再編計画

岡崎の京都府立図書館が拡張整備されることにもない、府立総合資料館の蔵書・資料が移されるという計画が明らかになったのは1997年のこと、京都府予算では岡崎の府立図書館の老朽化にともなう改築計画がうちだされたが、新聞報道で「新図書館の機能を充実するため、総合資料館の蔵書60万

冊を新図書館に移す」方向が明らかにされた。総合資料館は国宝に指定された「東寺百合文書」をはじめ、京都にかんする歴史資料、民俗資料、中国の歴史的漢書類、戦前戦後を網羅する教科書類をはじめ、全国的にも類をみない貴重な書籍・図画などが収蔵されている。

図書館は貸出しが主要な機能であり、そのために蔵書が行方不明となったり、新規購入のため蔵書の廃棄がされることは避けられない。（現に京都市中央図書館などはお粗末）でも総合資料館機能の縮小や後退があってはならない。そこで関係者と相談して、7月19日ハートピア京都で「府立総合資料館問題を考える府民のつどい」を開いた。図書館関係者や大学研究者、古本屋さんなども「新図書館の充実がいいが資料館の今の機能はぜひとも残してほしい」との声があがった。

私たちはこの間、資料館の実態を知るために収蔵庫を見学させていただいた。（私は前後2回参加した）立命館大学中国文学の笈文生先生も一緒したが、笈先生が「えっ！資料館にこの本があるのか」と驚かれたのは空海の「文鏡秘府論」を見つけたときだった。笈先生の研究室に来ている中国の大学院生は空海の研究で「文鏡秘府論」を読むために高野山に泊り込みで行ったという話だった。（高野山の「文鏡秘府論」は門外不出）

笈先生は「もっと早くここにあることを知っていたら」と言われたが、まさに総合資料館は貴重な資料の宝庫である。随筆家のM氏も「作家が歴史考証などのために資料館はとても貴重な存在」という。

私の内職はこの他、1998年には日本共産党左京地区委員会20年記念誌「日本共産党左京奮戦記」の編纂・発行や、「田中弘さん（日本共産党元京都府委員会委員長）を偲ぶ集い」、「人間座芦田鉄雄さんを偲ぶ集い」なども企画して取りくんだ。

いずれも「今、これをやっておかなければ歴史から消えてしまう」という危機感と若い人たちへの革新の伝統の継承を願ってのことである。

